

「人づくり」から始まる 産業クラスター



西藻別駅逡保存プロジェクト

産業クラスター研究会西オホーツク

北海道は「素材はいいが料理は素っ気ない」といわれるように、1次産品原材料供給基地として消費者から遠いところで、ある意味大雑把な生産をしてきたといわれる。これらの状況を改善し、内発的、自立的な地域経済を形成してゆくことが今求められている。

その対策のひとつとして1996年、道内経済団体などにより「北海道産業クラスター創造研究会」が設立され、北海道の産業クラスター構想が本格的に始動した。現在、道内各地に25のクラスター研究会が立ち上がっている。

クラスターとは、ぶどうの房のように特定の分野に関連する企業、機関、団体などが地理的に集中し、たがいに集積、競争かつ協力している状態をいう。

それぞれ個性的なクラスター研究会の中でも特にアクティブといわれる「産業クラスター研究会西オホーツク」。彼らが何を目指し、何をしようとしているのか、そしてそれが地域に何をもたらすのかを見た。

遠紋地域へのこだわり

網走支庁管内は、天気予報で網走、北見、紋別地方と区分されているように、経済圏、生活圏としても斜網、北見、遠紋の三つの圏域に分かれている。

この地域では、1997年4月に北見市を中心とする「産業クラスター研究会オホーツク」が、翌98年4月には網走を中心とする斜網地域で「産業クラスター研究会東オホーツク」が設立された。



奥山壽雄代表

この状況の中で、白滝村を地盤としていた奥山壽雄氏は、「最初は北見について行く気もあったが、10万都市の北見と、3万人の紋別や数千人規模の町村ではやはり論理が違う。自分たちの住む

地域への思い入れがなければ、地域はよくなるまい」と、同98年10月、紋別市を中心とする遠紋（遠軽・紋別）地域に「産業クラスター研究会西オホーツク」を立ち上げた。「正直なところ、北見や網走に負けたくないという対抗意識もあった。動機としては不純なところもあるかもしれないが、遠紋の論理でやっていくことにした。また、北海道におけるクラスター創造活動の中心となった北海道経済連合会の戸田一夫前会長が地元で熱心に講義をしてくれた。その意思を継いでこの西オホーツクのクラスター研究会をつくった」という。



北電紋別営業所内の事務局での総会

「人」が産業をつくる！

「メンバー集めには最初は苦労した。役所の幹部を呼ぶなどすればそれなりに人は集まるが、敢えてそれは避けた」本当に意思を持った人だけが来てくれればよいと、例会の案内はファクスを流すだけ。「意見を言わない人は次回から案内しません」こんなスタンスを貫くが、会員は徐々に増え、現在42名を数える。例会の出席率は毎回高い。

「毎度集まっては、終わった後に皆で飲んでワイワイガヤガヤやる。最初はひんしゅくを買った。しかし、このワイワイガヤガヤを重視した。どんなに会議をしても、会議の中ではなかなか出てこない。終わった後のワイワイガヤガヤの中からもいろいろなものが出てくる。互いに本音を語り合う信頼関係を築き、横の連携を育てた。これに1年以上かかった」と奥山代表は振り返る。

産業が成り立つ基盤は地域であり、地域を構成するのは人。「人が産業をつくる」という観点から、まずは市町村や業種の枠を超えて、遠紋地域に思い入れのある人々が連携、交流するところに活動の第一歩を置いた。まずは「人をつくる」ことから始めたのである。

多岐にわたる活動を

こうして動き出した研究会の活動は今年で5年目を迎えるが、そのアクティブさは活動内容の拡がりに現れている。

研究会の機関紙的役割を担う「オホーツク新聞」をはじめ、インターネットやCATV、データ放送などを活用する「情報ネットワーク部会」。ホタテや蕎麦、米などを利用した新しい食品を開発し事業化する「食品部会」。フィッシングネットワークの構築や、ツーリズムやコミュニティの拠



気晴館での食品部会

点となる長期滞在型素泊まり旅館「気晴館」を実験的に運用するほか、観光やレジャーについての活動を行う「遊部会」の3つの専門部会を手始めに、学生の社会参画で可能性を探る「エンタープライズ研究会」、湧別川流域7町村の勉強会



札幌三越でのキムチタラコ即売

「湧別川流域部会」、建築遺産の保全・継承・活用を目的とする「上藻別駅通保存プロジェクト」、既存の拠点標準化してネットワークし地域拠点とする「まちの駅」構想としては全国で初めて民間主導による推進を行う「まちの駅社会実験」、ひまわりによる新商品の開発を行う「ひまわり研究部会」、教育問題にも踏み込んだ「社会開発部会」、建築基礎工法プロジェクトなど、多岐にわたる分野に活動を広げつつある。

消費者の顔を見る

また、前出の網走支庁管内の3つのクラスターが共同で、千葉縣市川市の駅前商店街にアンテナショップ「オホーツク屋」を2年前に出店した。生産地である地元の消費者感覚で、たとえば、鮭とばを大きな袋に入れて売っても、誰も買ってくれない。食べられる最適な量がよいという。地元では頭から焼いて食べるホッケの開きにしても、頭と尻尾はゴミだからいらぬ。包丁で切るのも面倒。極端な場合、その包丁すらない。消費地か



千葉縣市川市のアンテナショップ「オホーツク屋」



事業化した食品工場 中央は視察中の戸田前道経連会長

ら遠い場所で、消費者の顔を見ずに地元の論理で生産していたところがある。そういった消費地による価値観やライフスタイル、ニーズの違いなど、「わかっていたつもりだったが、たいへん勉強させてもらっている」そうだ。

広域分散型クラスター

「観光地でも食べ物でも、よそでお客さんが千円払ってくれるものがあったら、紋別で同じように真似するのではなくて、50円でも100円でもいいから、いっぱいつくればいい」。100円のを10個集めれば千円になるし、場合によっては相乗効果でそれ以上の価値を生むかも知れない。

地域の中で偏りが生じるのはよくないともいう。「たとえば合併ですよ。市町村とか、JAとか。みんながそれぞれ光っていないと、単なる吸収合併になって、より一層偏ってってしまう」。

また、たとえば内地からせっかくガリンコ号に乗りに来て、流氷が来ていなければアウトである。しかし、他にメニューがいろいろあれば、観光客は満足して帰ることができるかもしれない。資源を広く分散することにはいろんなメリットがある。

任意団体からNPOへ

北見や網走に対する奥山代表のなかば個人的な対抗意識がきっかけでもあるのだが、「むしろそれがよかった」と副代表の山中雅一氏はいう。明確な理念を持つリーダーの存在があったからこそ、強い求心力のもとに前進してきたともいえる。またその理念がまさに、この地域で暮らす人々が共通に望んでいたことと合致していたのではないだろうか。

しかし、奥山代表は、「これは一代で終わることではなく、この先もずっと続いて行くこと。いつまでも任意団体のままでは限界がある」と、NPO法人化を道に申請。今年6月、道内のクラスター研究会としては初めてNPOの認証を受け、「ネット・プロジェクト・オホーツク・クラスター」としてスタートした。たとえば市町村の枠を超えて行政とも直接正式に手を組むことができるなど、任意団体では難しかった分野へも活動の幅を拡げた。

クラスターは単なる手段

産業クラスターを構築するということは、地域の特性を活かした産業形態を構築することが主眼だが、奥山代表は「クラスター構築は目的ではなく、単なる手段であり道具に過ぎない」と言い切る。人が集まり、共に地域を知り、考え、行動してゆくことで、その成果は産業の域を超えて、地域全体へのあらゆる面でのプラス効果が期待できる。「地域の産業をよくしよう」ということでなく、「地域そのものをよくしよう」ということが目的なのである。

ぶどうの房でいえば、よいぶどうの実をつくるために、まず根や土をよいものにする。そうすれば、おのずと実も房もどれもが、しかも継続的によいものになり、さらにはぶどう以外にもよいものが出てくるかもしれない。

他の地域ではなく、この地域だからこそできることという側面が重要。しかし、それはやはり、人々の地域に対する誇りと愛情によって支えられているものかもしれない。



社会開発部会の札幌トモエ幼稚園視察